

研修コース第12期「教室外活動」授業報告

—日本語学習者の主体的な学習活動を目指して—

青柳 にし紀・山本 もと子

キーワード：主体的な学習活動、日本文化体験、授業前アンケート、学習者による企画

要旨

信州大学留学生センター研修コース、第12期授業「教室外活動」の実際を報告する。本授業はプロジェクトワークの活動を中心に組み立て、学習者の主体性を重視しながら実社会の日本人や生の日本語に触れることを目的とした授業である。第12期（2005年前期）「教室外活動」（水曜日午後）では試験的に授業前アンケートを実施し、学習者が日本文化の体験を多く望んでいたことから、日本文化の体験を中心に授業を組み立ててみた。さらに、学習者自身が授業の企画に携わり、教師の指導を受けながらも自律的に見学場所を決定し、実際に見学先の日本人と実行上の交渉に当たるなどの活動を取り入れた。その結果、学習者にやりがいを与えることができた反面、時間的、経済的負担が大きいなどの問題も生じた。授業前アンケートの結果を重視しすぎたとの反省から、今後は教師から提示する活動と学習者の希望を取り入れる活動とを分け、両者に検討を加えて授業を組み立てるべきだと考える。

1. はじめに

日本語学習者が日本語能力を向上させていくうえで「自分の学習活動に主体的にかかわる」という姿勢は重要な要素である。この場合、教師は後方から学習者の学習活動全体をサポートし、授業をコーディネートしていく必要があるが、実際には教師がこの立場を守り、学習者の主体的な学習活動を導くことは難しい。例えば、初級レベルのクラスでは、教師が中心に学習を進めざるを得ず、学習者は目的意識の希薄なまま授業に参加したり、逆に中級以上のクラスでは、学習者の主体性に任せすぎて収拾がつかなくなってしまったりするケースもありうるからである。

学習者を主体的な学習活動に導く方策は授業のシラバスに大きく起因しなければならないと考えるが、実際に学習者の学習レベル、年齢、ニーズなどを考慮しながら授業を進めていくと、どうしても後行シラバスになりがちである。

授業の流れを予測して学習者の学習活動を見守っていくために、授業の実際をある程度記述し、今後に備えておく必要があると考え、授業報告を作成することにした。

山本・青柳が担当した信州大学留学生センター研修コース第12期（2005年前期）「教室

外活動」も学習者の主体性に重点を置くことを目標にした授業である。本授業では試験的に学習者に授業前アンケートを実施し、何を学習したいか希望を探った上で、できるだけ学習者が主体的に行動できる活動を増やすように心がけた。結果として、学習者に負担はかけたものの、達成感を与えることができたと思う反面、学習者の希望に流されすぎて教師側が意図した活動ができないという反省も生まれた。本授業の報告を通して、今後、「教室外活動」においてどのように主体的な学習活動へ導いていくかについて考えたい。

2. 本授業が目指したもの

「教室外活動」は研修コース第5期（2001年後期）から第7期（2002年後期）にかけて行われた授業「プロジェクトワーク」を第8期（2003年前期）から改称したものである。第5期から第7期まではプロジェクトワークと呼ぶ学習方法を中心に授業を組み立ててきたものであるが、「教室外活動」と改称した経緯には「プロジェクトワークという総合的な活動の中でも特に教室外での活動を中心に授業を行いたい」という意図があった。

プロジェクトワークは田中（1988）が述べるとおり、「学習者が自分たちで話し合っ計画をたて、実際に教室の外で日本語を使って（中略）作業を行い、作業の結果をもちよって1つの製作品にまとめる」総合的な学習活動である。本授業は第8期で「教室外活動」と改称した経緯もあり、加えて、第12期から「教室外活動」の授業時間が2コマから1コマに縮小したことなどから、総合的な学習活動の中でも特に教室外における体験学習などを中心にせざるを得なかった。その中で、日本語能力の向上を目指し、時間外に課題を与えるなどの形で「話す」「書く」「聞く」「読む」の4技能を総合的に使って生の日本語と触れさせるように努めた。プロジェクトワークにおいて学習者の主体性を重んじて活動を進めるがごとく、本授業でも「学習者が自分たちで話しあって計画をたて」、学習者が主体的に生の日本語に触れることを目指したことは言うまでもない。

3. 研修コースにおける本授業の位置づけ

第12期研修コースは日本語レベルの高い学習者たちが集まり、そのうえ日本語力に差が見られたため、通常は2クラス編成を3クラスにし、さらに、コース前半と後半でクラス編成をしておいたことなどは特徴的であった。「教室外活動」に関しては、第11期まで2コマの時間数が1コマに縮小されるなどの変更があったことは既述のとおりである。

3. 1. 研修コース時間割

第12期研修コースの時間割、学習者、「教室外活動」の日程についてここで簡単に触れておきたい。時間割を以下に記す。A・B・Cの3クラスのうち、開講時の4月はAクラス学習者1名がある程度の日本語レベルに達するまで、1名のみ単独授業を行い、B・Cクラスが合同で授業を行った。5月以降はA・Bを合同クラス、Cクラスに変更した。午後の授業は通常、クラス別に行うものであるが、学習者の日本語能力、各クラスの人数を考

慮したうえで「教室外活動」のみA・B・C合同クラスで行った。「教室外活動」の意義を、実際に教室外で生の日本語と触れ、「会話・文型」や「漢字」、「発音・聴解」など他の授業で学んだことを生かそうとする点は、第11期以前の研修コースと同様である。

| | | A・Bクラス | | | | | Cクラス | | | | | |
|---|-----------------|-----------------------|---|-------------------------------|--------|--------|----------|---------------------|----------------------------------------|------------------------------------|--------|------------------------------------|
| | | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | |
| 1 | 9:30~ 11:00 | 会話・文型 『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』 | | | | | 応用 練習 | 文型 『S F J』 | 会 話 『日 本 語 生 中 継』 | 文型 『テ ィ マ 別 中 級』 | | 文型 『テ ィ マ 別 中 級』 |
| 2 | 11:00~ 12:30 | | | | | | | | | | | |
| 3 | 13:30~ 15:00 | 発 音 ・ 聴 解 | / | 教 室 外 活 動 Cと合同 | 漢 字 | 作 文 | 読 解 | 作 文 | 教 室 外 活 動 ABと合同 | 漢 字 | 作 文 | |

表1 第12期研修コース時間割（5月以降）

3. 2. 受講者内訳

本授業の受講者は以下のとおりである。

開講当初、学習者aはひらがな・カタカナを独学で学習してきたが、ほぼゼロ学習者に近い日本語力であった。学習者cは第11期研修コースAクラスからのリピーターで、テキスト『みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ』を終えたレベルであったが、本人の希望もあり、コース後半は同テキスト第20課以降を再受講する形となった。

概して、Cクラス学習者は日本語中級レベルで、開講時すでに日本語である程度コミュニケーションを取ることができた。

Aクラス（1名）

学習者a（農学部短期留学生、大韓民国サンジ大学2年、男性）

Bクラス（2名）

学習者b（農学部短期留学生、大韓民国サンジ大学2年、女性）

学習者c（人文学部研究生、アメリカ合衆国、男性）

Cクラス（3名）

学習者d（人文学部短期留学生、大韓民国カトリック大学3年、女性）

学習者e（人文学部短期留学生、大韓民国カトリック大学3年、女性）

学習者f（人文学部短期留学生、大韓民国カトリック大学2年、女性）

「教室外活動」のクラス編成にあたっては、日本語レベルが全く異なる学習者を一緒に受講させることでニーズ等の不一致が生じるなどの懸念もあったが、Aクラスの学習者が1人であることや、青柳（2005）で述べたとおり、学習者が互いに協力しあう環境が生まれることを期待して、A・B・Cクラス合同で受講させることにした。

3. 3. 日程

本授業の日程は以下のとおりである。

| 回 | 月/日 | 授 業 内 容 |
|-----|------|------------------------------------------------------------|
| 1 | 4/13 | オリエンテーション①/今後の予定 i 松本街歩き①準備 |
| 2 | 4/20 | 松本街歩き②各自のテーマに沿って調査 |
| 3 | 4/27 | 松本街歩き③調査結果報告 オリエンテーション②/今後の予定 ii 日本文化体験1 (茶道①) ビデオ鑑賞 |
| 4 | 5/11 | 日本文化体験1 (茶道②) 体験学習 |
| 5 | 5/18 | 日本文化体験2 (着付け①) 体験学習 i |
| 6 | 5/25 | おしゃべりパーティー①準備 i 日本文化体験3・4 (学生企画準備) |
| 時間外 | 6/1 | 日本文化体験2 (着付け②) 体験学習 ii |
| 7 | 6/8 | おしゃべりパーティー②準備 ii 日本文化体験研究発表会①準備 i |
| 時間外 | 6/10 | おしゃべりパーティー③準備 iii (6:30p.m.パーティー開始) |
| 8 | 6/15 | 日本文化体験3 (味噌工場見学) 学習者 b・f 企画担当 |
| 9 | 6/29 | 日本文化体験4 (神社見学) 学習者 d・e 企画担当 |
| 10 | 7/6 | 日本文化体験研究発表会②準備 ii 学習者 a・c 担当 |
| 11 | 7/13 | 日本文化体験研究発表会③発表 (信州大学附属松本中学校生徒 4 名の来訪) |

表 2 第12期「教室外活動」日程

4. 運営の実際

本授業は以下の①～⑤で示す流れで行われた。3-3表2で示した日程もこの流れに沿って組み立てられたものである。この流れは①の授業前アンケートを参考に、学習者の意欲、日本語能力、授業時間、授業協力者の予定などを考慮して決定したものである。すなわち、「茶道」や「着付け」など教師が段取りをした活動を実施しながら、並行して学習者が各自の企画を進めて行った。教師の助言を受けながら、最終的に学習者自身が見学先の相手に交渉し、学習者自らの手で日本文化が体験できるように意図した。授業時間が少ない上に、学習者が体験したいと申し出た活動が多かったため、各活動が日本文化を体験するだけの皮相的な学習になり、準備やフィードバックが十分にできなくなるのではないかと懸念もあった。そのため、授業最終回で研究発表会を行うという形で、まとまった一つの「製作品」となるよう配慮したつもりである。

① 授業前アンケート

② 教師が企画した活動 (松本街歩き、茶道、着付け、パーティー)

- ③ 学生が企画した活動（工場見学、神社見学）
- ④ 研究発表会
- ⑤ 授業後アンケート

以下、ここで示した流れに沿って授業内容、学習者の様子、反省点について記述したい。

4-1. 予備調査

本授業の日程を組み立てる際、研修コース全体で行った学習者のニーズ調査のほかに、簡単な授業前アンケートを行った。このアンケートでは第12期以前の「教室外活動」で行われてきた活動（「松本街歩き」「日本人と話そう」「日本文化体験」「おしゃべりパーティー」「文集作り」「小学校訪問」「祭り見学」「インタビュー発表会」「酒蔵訪問・工場訪問」「日本料理作り」）を学習者に提示し、その中でどの活動を学習してみたいか、また、ほかにどのような活動が考えられるかを記述回答してもらった。

アンケートの結果、学習者 b d e f が「松本街歩き」を望まないという回答、「文集作成」「インタビュー発表会」「おしゃべりパーティー」については、ほぼ全員の学習者が望まないという回答したものの、他の活動については学習してみたいという回答が多かった。さらに、学習者 a から「日本の楽器、スポーツ」、学習者 c から「神道・仏教関係」、学習者 d から「料理、着物」、学習者 e から「料理、神社」、学習者 f から「家庭訪問、日本のスポーツ」を体験、学習してみたいという回答を得た。

このアンケート結果を踏まえ、さらに「教室外活動」第1回、第3回、第7回の中で話し合いの時間を設けて学習者とともに日程を組んでいった。特に、料理、着物、スポーツ、音楽、宗教などのカテゴリーで日本文化を体験したいという学習者が多かったことから、「日本文化を体験すること」を授業全体の目標に掲げて活動を進めていった。「松本街歩き」と「おしゃべりパーティー」については学習者から反対の意見も見られたが、これらは第5期「プロジェクトワーク」から第11期「教室外活動」まで続けられており、学習者にとっても必要な活動だと判断したため、教師側から活動の実施を提案し、学習者の了解を得たうえで日程に加えた。

4-2. 教師が企画した活動

コース期間前半は日程やシラバスが決定できず、試行錯誤の状態が続いた。4-1の予備調査の結果を分析し、学習者と相談しながら、次第に日程を組んでいったことはすでに述べたとおりである。第11期まで慣例として続いている「松本街歩き」「おしゃべりパーティー」「茶道体験」に加えて、学習者から希望のあった「着物着付け体験」は教師が段取りをして、これらをコース期間前半で行った。次に、これら4つの活動について実施内容と学習者の様子、反省を述べたい。

4-2-1. 松本街歩き

4-2-1-1. 実施内容

第11期までの教室外活動では、次のような行程、方法で「街歩き」を行っていた。

- (1) 松本駅・松本バスターミナルで「バス乗り場、時刻表を調べる (Aクラス)」「バスのチケットをキャンセルし、新たに時間変更して予約を取る (Bクラス)」など小問題としてのタスクを課し、松本市内の移動方法や他学部¹への交通手段を確認する。
- (2) 「ふれあい国際・情報センター」の場所を確認、見学する。
- (3) 古い町並みが残っている松本中町や縄手通りを見学しながら、各学習者のレベルに見合ったタスクを課し、昼食を取り、解散。希望者はその後、松本城を散策する。

しかし、学習者の人数や日本語レベルによって、タスク達成のために膨大な時間がかかり、中級レベルの学習者には退屈な印象を与えてしまったようだとの反省もあった。そこで、今期は授業時間の削減に伴い、全員が共に行動するのではなく、各学習者がそれぞれの興味に応じて自由に散策し、そこで見つけたテーマに沿って調査し、後日、調査結果を発表するという方法を取った。学習者 a c は教師と行動を共にしたが、学習者 b d、e f は興味が同じだという理由で、ペアを組んでそれぞれに行動した。調査発表では、スライド、OHP、ハンドアウトなど各学習者が得意な方法で発表をさせた。

4-2-1-2. 学習者の様子、反省

第12期は学習者の日本語レベルに合わせてタスク性を高めようと、既述のごとく個別に行動・調査するという方法を取った。事前指導の段階では、学習者 a が「交通」、学習者 c が「神社・寺」、学習者 b e が「日本の食べ物」、学習者 d f が「若者のファッション」について調査する意向を示していたが、調査発表の際は学習者 b e が「和菓子」、学習者 d f は「着物」に変更して報告を行った。

「松本街歩き」後、フィードバックとして調査発表を行ったことは、教師がコース初期段階で学習者の実力を知ることができたという点、また、学習者にとってもコース修了発表会へ向けての良いモチベーションをもたせることができたという点で収穫であった。

しかし、今回の活動のように学習者が個別で行動・調査した場合、教師が全員に付き添うことは難しく、教師の目が行き届かないまま完全に個人活動になってしまう学習者が数名出てしまうという問題が生じた。事実、授業後に学習者に対して行ったアンケートで「わざわざ授業時間に行く必要が無かった」などの意見も出た。その結果、第12期以前の方法と同様、全員で決めたコースを回り、中級以上の学習者には後日、興味を持ったテーマについて調査発表を、初級の学習者には学期始めでまだ日本語が慣れていないため、感想程度のタスクを、それぞれ課した方が良かったと思われた。特に来日したばかりのゼロ学習者にとって、コース始めに行う調査発表はかなり負担が大きく、今後の授業に対する不安を煽ることになる可能性もあり、講師の配慮が欠けていたのではないかという反省点

はある。

4-2-2. 日本文化体験1 (茶道)

4-2-2-1. 実施内容

導入授業として茶道に関するビデオを全員で視聴した後、実際に学外から茶道の師匠²を招請し、お茶室を使って体験学習を行った。この茶道の先生には毎期お願いして体験学習が続いているが、第12期は先生のご好意により「百竹亭」と呼ばれる、松本には1つしかない正式なお茶室を使用させていただいた。そのため、授業は足袋（白い靴下で代用）、草履に履き替えて待合室で待つところからはじまり、庭を散策、つくばいを使って手を洗い、にじり口を通り、履物をそろえてお茶室に入るといふ、フォーマルな茶道の全過程を学ぶことができた。また、お茶室内でも狭いお茶室ならではの心得や実際の茶道具、飾ってある花、掛け軸など細かいご説明を受け、お茶の点て方、もてなす人・もてなされる人の心の持ち方などをお教えいただくことができた。授業終了後は写真撮影を行ったり、学習者と師匠とが簡単にことばを交わしたりしただけで、フィードバックはとくに行わなかった。

4-2-2-2. 学習者の様子、反省

正式なお茶室と師匠とによる授業で、学習者の心には強く茶道の精神が響いたようである。語学としての日本語だけでなく広い意味で日本人の心を学習する良い機会になったと思われる。特に、学習者eは授業最終回の「日本文化体験」、さらには研修コース全体で行われた修了発表会でも茶道を取りあげ、日本の茶道の精神について追究していることに言及した。

貴重な機会を得たにもかかわらず、授業時間が足りないという理由でフィードバックの時間を取らなかったことが悔やまれる。後に行った工場見学や神社見学でレポートを宿題として課したようにこの体験終了後にレポートを提出するなどを課すべきであった。

4-2-3. 日本文化体験2 (着物・日本食マナー)

4-2-3-1. 実施内容

松本市役所広報国際課に着物に関する体験学習をしたい旨を相談したところ、市内の留学生応援ファミリーを経由して、着付け指導の師匠³を紹介していただいた。当初は大学内で簡単に着付けを見せていただくだけの予定であった。しかし、師匠のご好意で、師匠が担当するNHK着付け教室「あなたが変わるきもの講座」⁴を午前中に見学、さらに昼食をご馳走になった後、実際に学習者たちに着付けをしていただけることになった。

着付け教室では、靴を脱いで上がるところから、順番に正座をし、手をついて挨拶をする作法を教えていただいた。着付け学習とは直接関わりのない分野ではあったが、師匠のお宅で食事を頂戴した際には、日本料理の盛り付け方、座布団の置き方、配膳の仕方、和

食のマナーなど一通りご指導を賜り、師匠と学習者とが異文化について話をしながら和やかに食事を頂戴した。後片付けも学習者が主体となって手伝わせていただいた。和食について多くのことをお教えいただいたために、当日中に学習者全員が着物を着せていただく時間がなかった。そのため、休講日⁵に再度お宅で残りの学習者にも着付けをしていただくご好意にあずかった。

4-2-3-2. 学習者の様子、反省

着付け教室で教室の弟子たちが着付けをしていく経過を見学していくなかで、学習者は「着物を着るのはとても難しい。」と感想を述べた。学習者自らが着物を着た段階では、女性学習者は庭に出て着物姿の写真をたくさん撮り、嬉しそうに歩きまわるなど非常に満足した様子を見せた。男性学習者も羽織袴を着て、女性学習者と一緒に写真を撮ってもらっていた。

昼食の間では正座に慣れていない韓国の学生が足をもぞもぞし始めると、韓国の文化に理解のある師匠が「胡坐をかいてもいいですよ。」と促す場面もあった。師匠は着物文化を広めるために何度か外国を訪問、異文化について非常に興味をもっておられ、学習者の母国について質問され、異文化交流の重要性について話が弾んでいた。

また、師匠宅で昼食を頂いたことによって、4-1の予備調査にあった「家庭訪問」や「日本食を食べたい、作りたい」という学習者の希望がかなう結果となった。男性学習者2人にとってはあまり興味を持たない企画ではないかと心配していたが、日本人の心や和食のマナーなど着物以外で学習したことが多く、全員の学習者が充実した一日を過ごすことが出来たようである。なかでも、学習者fは「日本文化体験発表会」・修了発表会を通して着物と韓服について興味深い発表を行った。

授業方法の反省としては、茶道と同様にフィードバックの時間を取らなかったことが悔やまれる。体験終了後にレポートを提出するなどを課すべきであった。

4-2-4. おしゃべりパーティー

4-2-4-1. 実施内容

教師が企画して実施を促した活動ではあったが、実際にはパーティーの実施内容立案から準備、実行までほとんどの過程を学習者が主体で行った。まず、教師から概略の説明と係の分担を要請し、あとはパーティーの内容など実行委員長の司会によって話し合い、準備、当日の活動は概ね学習者が主体となって進められた。

その結果、①はじめのことは ②乾杯の挨拶 ③着物ショー ④歓談 ⑤学習者bによるギター演奏 ⑥いすとりゲーム ⑦学習者cの説明によるチキンダンス ⑧おわりのことは、の順で進化した。

「③着物ショー」に関しては着付け教室の師匠のご好意もあり、教師から学習者に進行内容に組み込むよう勧めた。関連して、壁に着物を着た体験の写真を貼るなどの飾りつけ

も行った。毎期、学習者が書くパーティー招待状は時間短縮の関係で授業時間内に書かせることができず、各自への宿題となった⁶。

4-2-4-2. 学習者の様子、反省

「日本文化の体験」のなかで、この活動だけが異質になってしまった。そのため、学習者には唐突の印象を与え、準備も大変だったようである。しかし、大変な中でも学習者全員が協力し、パーティーとしては大変な成功をおさめ、学習者には充実感を与えることができたと思われる。

係分担は実行委員長が立候補で学習者 e に決まり、司会が学習者 f、「はじめのことば」が学習者 b、「おわりのことば」が学習者 c、余興係が学習者 a、d となったほか、会場係を学習者 b、c、d、買い物係を学習者 a、e、f が行った。余興としてはほかにも「グループ別クイズ」などを予定していたが、当日のパーティーの雰囲気を見て学習者 e、f の判断により取りやめるなど臨機応変に対応していた。

普段の生活では経験しない司会やゲームの説明などを日本語で話したり、日本語で写真説明を掲示したりするなど、総合的な日本語の勉強としてはよい勉強になったと思われる。反面、学習者にとって負担が大きくなったことも事実で、思い通りに自由な時間を作ることができないため、日本人がたくさんいるパーティーという場にもかかわらず、あまり気楽に日本人と話す場にならなかったのは仕方がないといえよう。ディスカッションなど別の場で日本人と深く話す機会を持たせるべきであった。

4-3. 学生の企画

4-1. の授業前アンケートや授業初回の話し合いで「温泉」「日本の楽器」の体験要望が出るなど、学習者が日本文化に大きな関心をもっていることがわかった。また、授業が進むにつれて、まだ日本語学習歴の浅い学習者 a を含め、問題解決能力、日本語習得能力が非常に高い学習者が揃っているということがわかってきた。そのため、第3回の授業で、最終授業の発表会に向けて6人が3ペアに分かれて各々独力で体験を企画することを提案した。第3回の時点では、学習者 a、c が「日本の音楽について」、学習者 b、f が「工場見学」、学習者 d、e が「神社、寺見学」を企画することが決まった。「茶道」「着物」の体験学習をしている間、並行して各ペアがそれぞれ、大学のサークル、民間団体、インターネット、本、電話帳などの情報を利用して授業で体験できる企画立案を検討した。学習者 a、c ペアは琴や尺八、三味線など邦楽体験の場所を探索したが、適当な所がなく、結局「日本のスポーツ」に変更、大学内の「柔道」サークルガイダンスに出席して情報をもたらしてきた。学習者 d、e ペアも直接、大学付近の神社へ行って見学交渉を試みた。学習者 b、f ペアは電話帳を網羅的にあたって酒蔵見学の予約を試みた。しかし、実際はなかなか学習者たちが独力で予約を取ることが難しく、最終的には教師がそれぞれの企画に根回しし、情報を学習者に提供する結果となった。最終的に、第6回授業で「おしゃべり

パーティー」準備と並行して、各ペアに目的の場所へ交渉をさせ、以降の予定が決定した。教師の根回しという点では、学習者が探してきた場所・団体に対して教師からも後で電話をし、フォローしておく必要があった。すなわち、実際にそこで何が学習できるか、学習者にとって好ましく適当な活動であるかなどを教師が判断し、良いと決まれば改めて教師の側から相手の承諾と予約を取り付けなければならなかった。しかし、たとえば「柔道」サークルへ教師から予約を取ったあと、「スポーツ体験はほかでできるので、そば打ち体験をしたい」と学習者から申し出があり、予約をキャンセルしなければならなかったり、教師が根回しで調査したことによって、学習者が探してきた工場や神社では十分な見学ができないと判断され、改めて教師が紹介する別の工場や神社に変更しなければならなかったりすることもあった。活動の決定には手間と時間がかかるため、学習者たちに苦労と不安を抱かせてしまうがごとき場面もしばしばあったが、実はこうして費やされた手間や時間こそ生きた教室外活動とも言えよう。事実、電話で聞いたりするなど学習者の主体性に任せた活動は学習者に好評であった。

以下、最終的に活動が決定したみそ工場の見学、神社の見学について述べる。なお、学習者 a、c ペアはそば打ち工場に予約を取ることができたが、松本市広報国際課が安価で外国人のために企画した活動の中に同じものがあり、さらに見学日が研修コース月例テストの当日と重なることから計画を断念した。代わりに学習者 a、c には「日本文化体験発表会」の準備を中心になってすすめてもらうことで了承を得た。

4-3-1. 日本文化体験 3 (味噌工場見学)

4-3-1-1. 実施内容

工場見学担当の学習者 b、f は今期も、去年の教室外活動で行った酒蔵見学を計画していた。しかし、教師が酒屋に直接問い合わせたところ、「酒造りは冬季の作業なので実際に作っている様子は見学できない」という回答であった。また、工場が遠く移動に時間がかかるということもあり、酒蔵見学は断念することとなった。その後、学習者が工場を探す手段に困っていたので、教師が日本文化に関係あるインターネットホームページの検索の補助を行い、いくつかの候補工場を学習者に提示。その中で、石井味噌店⁷に決定した。学習者には知らせなかったが、工場を決定する前に教師が店主に授業内容や外国人留学生から見学予約の電話などがあることを説明、依頼しておいた。第 6 回授業で学習者 f が大学内から同味噌店に電話交渉し、見学日時を決定した。

工場見学当日はまず、味噌汁の試飲、次に、味噌蔵にて店主より伝統的な味噌の作り方、保存方法、石井味噌の特徴など説明を受けた。学習者の質問時間を確保してもらい、様々な味噌商品を見学させていただいた。学習者には予めメモ用紙を渡し、店主の話を聞き取って書かせ、後日レポートとして提出することをタスクとした。レポートは提出後、教師が文法チェックをし、清書させたものに教師が書いた礼状と写真を添えて店主に送った。後日、担当学生 b、f は暑中見舞いを書いてお礼状とした。

4-3-1-2. 学習者の様子、反省

学習者は熱心に店主の説明を聞き、「味噌料理にはどんなものがあるか」「味噌は体にいいというがどんな栄養があるか」などの質問をしていた。

味噌樽見学と説明を入れて1時間ほどで、移動時間を含めると時間的にはちょうどよい活動であった。「茶道」「着付け」の反省から、この工場見学では体験後にレポートを課したが、これは限られた授業時間に対し学習者にフィードバックを与えるという点で良かったといえる。体験後のレポートタスクを与えたことで、学習者は集中して店主の話聞くことができ、学習効果を高めることができた。メモ用紙を渡しておいたことで説明中分からない単語も後日調べることが容易となり、また、「1人1つずつ質問を考えておくように」とアドバイスしておいたことも、店主の説明に対して活発な質問を促した。

結果として、工場見学の授業は短時間で効率的に4技能を使うことができ、今期の教室外活動の授業として適していたといえる。ただ、時期的に味噌の仕込みは終わっており、味噌の作り方の話をきいただけに終わってしまったため、実際に学習者が体験できる場面がなく、学習者の期待と若干のずれが生じてしまったことは教師の事前調査不足であった。

4-3-2. 日本文化体験4（神社見学）

4-3-2-1. 実施内容

学習者dが中心になって、見学させてもらえる神社を探した。先述のとおり、当初、大学近隣の神社を学習者dが探してきたが、近くなので学習者個人でも見にいけること、授業でしか体験できない活動が特に見つからなかったことから、教師が四柱神社⁸を紹介した。第6回授業、その翌日と2日間かけて学習者dが見学を交渉、了解を得た。教師からも依頼の電話を入れ、かつ「日本の楽器を見たい」という学習者a、cの希望も考慮し、雅楽演奏を請願しておいた。

神社見学当日は四柱神社宮司⁹の好意で神社拝殿に上がることを許され、手水などの説明を受けた後、お祓いの正式参拝を体験した。さらに、「神道」の講義を受け、ビデオ鑑賞等もさせていただいた。最後に請願の雅楽演奏を聞かせていただき、写真撮影などで終了した。味噌工場見学に続いて、ここでも質問回答形式のレポート提出を義務付けた。味噌工場見学と同様、ここで提出されたレポートを清書させたものに、教師が礼状と写真を添えて宮司にお送りした。この企画を担当した学習者d、eに暑中見舞いのお礼状を書いて送らせた点も同様である。

4-3-2-2. 学習者の様子、反省

学習者cは友人の結婚式で帰国していたため出席できなかった。ほかの学習者は神社独特の雰囲気の中で緊張しながらも、「神道の人教会で結婚式をするのはなぜか」「ペンにも神様がいると思うか」など活発な質問をした。学習者dは、「存在するものすべてに神が宿っている」という考え方に感銘を受け、「日本文化体験」発表会、修了発表会でもそ

のことをテーマに発表した。学習者 a はキリスト教信者であったため、正式参拝することに抵抗があった様子だった。神社見学は学習者が言い始めたこととはいえ、事前に参拝をせずともよしとする配慮をするべきであった。

6月下旬ころからは、研修コース全体で行われる月例テストや他授業の提出物・小テストが重なり、学習者には蓄積された疲れが見え始めた。当初は味噌工場の場合にならってレポートを提出させることも考えたが、学習者の負担を考慮して、レポートは断念した。代わりに宮司の説明を聞き取る際に役立つと思われる3項目の質問を与え、回答を提出された。結局のところ、学習者にとって負担はあまり軽減されなかったようであるが、集中して宮司の話の話を聞くという効果は顕著であった。短時間で効率的に4技能の学習ができたという点でも味噌工場の場合と同様の成果が得られた。このことから、「茶道」「着物」など教師が企画した活動でも、学習者に対してははじめからレポート提出を課しておけば、学習者が課題の増減に戸惑うこともなく、日本語のレポート形式に徐々に慣れていくという効果と、活動に対するフィードバックが期待できるという教訓を得たと思われる。

4-4. 研究発表会

4-4-1. 実施内容

本授業では第5回「茶道」、第6回「着物」、第10回「工場見学」、第11回「神社見学」を中心に「日本文化を知ること」を目標として体験学習を進めてきた。その総括として「日本文化体験」研究発表会を行うこととした。この発表会の目的はもう1つ、研修コース終了時に予定される「研修コース修了発表会」に向けての練習でもあった。そのため、修了発表会と同じ会場、形式で行うこととした。原稿・スライド作成の準備に授業1時間を充てたほか、発表前日、前々日午前「文法」の時間が準備に割かれた。残りは自宅での作業となった。発表当日の運営も修了発表会を模して、全て学習者の手で行われた。すなわち、司会を学習者 d、プログラム・書記を学習者 f、「はじめのことば」学習者 c、「終わりのことば」学習者 e、プロジェクター操作を学習者 a、ビデオ操作を学習者 b の分担で行った。

研究発表テーマは、学習者 a 「日本の味噌と韓国の味噌」、学習者 b 「納豆」、学習者 c 「お寺の体験」、学習者 d 「神道を通じて見る日本」、学習者 e 「茶道」、学習者 f 「着物」であった。発表当日は留学生センター教官6名と、教育学部附属松本中学校教諭1名と生徒4名が見学にみえた。学習者はほぼ自宅での準備であったため、至らぬ点も見られたが、修了発表会の練習としてはよい発表内容であった。

4-4-2. 学習者の様子、反省

自宅での作業が多く、学習者にとっては大きな負担のかかる発表であったが、学習者がこれまで授業で体験した日本文化を振り返ることができたという意味ではよい研究発表会であった。準備期間が短く、個人作業に任せて教師の事前チェックが全くできなかったに

もかかわらず、素晴らしい発表内容だったので、学習者も達成感を味わったようだった。

既述のごとく、この発表会はコース最後に行われる修了発表会に慣れるために計画したという意味もあったが、一方で学内の教官方や日本人学生に発表会の案内をしたこともあり、予想以上の聴衆があった。そのため、修了発表会と全く同じ緊張感の中、発表を行うこととなり良い演習となった反面、学習者に次の発表への意欲を失わせてしまうのではないかという懸念が生まれた。修了発表会と区別するためにも、教室内で学習者と担当教官だけで小規模に行ったほうが良かったかもしれない。

予期せずして、信州大学教育学部附属松本中学校¹⁰の生徒の見学を得た。発表会后、中学生と学習者が交流する機会があり、普段接することができない10代の日本人と話す機会を持てたという点ではよかった。しかし、学習者は発表で疲れてしまってよい機会を十分に生かすことができなかったようにも思う。今期は授業時間枠削減で実現できなかったが、第11期までに行われていた「中学校訪問」のような機会を持つことも再検討されてもよい。

4-5. 授業後アンケート

本授業の内容について、学習者にアンケートを実施した。7月初めの第12回授業時に質問用紙を配布、7月末までに学習者全員から用紙を回収した。以下はその回答をまとめたものである。

4-5-1. 各活動について（学習者の回答）

本授業で行われた各活動について質問した結果を表3に記す。

| 活動 | 評価 | | | | | 備考 |
|------------|----|-----|------|-----|-------|--------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | |
| 松本街歩き | df | a | — | bce | | |
| 茶道 | — | — | — | af | bcde | |
| 着物・日本食 | — | — | — | a | bcdef | |
| おしゃべりパーティー | — | a | e | bdf | c | |
| 味噌工場見学 | — | — | adef | bc | | |
| 神社見学 | — | — | df | ae | b | c 友人結婚式のため欠席 |
| 日本文化体験発表会 | — | def | a | bc | | |

表3 授業後アンケート

※5段階の選択式で回答してもらった。5が最も良い評価を表す。アルファベットは学習者を表す

上記の評価の理由を以下に述べる。

(1) 松本街歩き

高く評価したのは「自分の興味について調べてよかった（学習者b）」「自由であっちこっち行けたので良かった（学習者e）」、低く評価したのは「4月20日ごろにはAクラス

が日本語も生活もまだなれませんでしたから、テーマをもってあるくことはむりだともおもいます（学習者 a）」「授業の時以外に自分でもできると思う（学習者 d）」「一人でもできると思うからあまりよくなかった（学習者 f）」などからである。

（2）茶道

全員満足度が高く、「日本の文化の中で有名なことですから本当によかったです。（学習者 a）」「日本の伝統の体験ができておもしろかった（学習者 b）」「茶室に行って日本の伝統文化を体験できてよかった（学習者 d）」「茶を飲むことのみならず、心のしょうようまでできてよかった（学習者 f）」などの回答であった。

（3）着物・日本食

茶道と同様に評価が高く、「茶道と着物は日本をだいひょうすることですからよかったです（学習者 a）」「着物を着て写真をとったりいい思い出になった（学習者 d）」「見ることではなく、直接着られていい経験だった（学習者 f）」などの感想が得られた。

（4）おしゃべりパーティー

授業前アンケートでは反対意見が多かった活動であったが、評価を 4 や 5 とした学習者が 3 分の 2 いた。低評価の意見としては、「楽しかったけど、準備したときとても疲れた（学習者 f）」などがあり、学習者にとって負担だというものであった。評価 2 とした A クラスの学習者 a は「おしゃべりパーティーはいい経験だとは思いますが、準備が本当にふたんにかんじました。（学習者 a）」という答えであった。確かに、第 12 期は学習者数が少なく、その分、1 人当たりに分担させられる仕事量が多かったことも、負担を感じさせた一因といえるだろう。

（5）味噌工場見学

評価は 3 が多かった。「工場をさがすときたいへんだったが、先生が手伝ってくださってよくできました。（学習者 b）」「授業中に行けなかったら味噌工場は行けないところだった（学習者 f）」とする意見がある反面、「いい経験だと思います。しかし、説明がやく 90 % 以上でしたから少しざんねんだと思います。（学習者 a）」「ただ説明だけ聞いたので残念（学習者 e）」など、実体験を望む学習者の期待とずれがあったことは先述のとおりである。

（6）神社見学

「ただ神社の見学ではなく、宮司さんの詳しい説明を聞いてよかった（学習者 d）」「この授業がなかったら神社の中までは入れなかったと思った（学習者 e）」「神社の外だけでなく、その中に入って楽器、神道について知るようになってよかった（学習者 f）」。味噌工場見学と比較して体験の内容にも満足した感想が多い。学習者はただ見学し、説明を聞くだけでなく、授業でしか経験できない活動をより多く希望しているといえよう。教師もできるだけこれに答えていくように努める必要がある。

（7）日本文化体験発表会

評価が分かれた。良いと答えた学習者は「準備の間とてもたいへんだった。終たあと気

分はよかった（学習者b）」「大変でしたが去年の新聞より好きでした（学習者c¹²）」、悪いと答えた学習者は「修了発表会の前発表だからいいきかいだと思いますが、学期の末ですからいろいろなことがあります。ですから、時間があまりないですから少しふたんになりました。（学習者a）」。学期末は他の授業でも課題が多いので発表の準備をする時間があまりなく、負担に感じたようだった。

4-5-2. 全体の活動について（学習者の回答）

第12期「教室外活動」全体からみた活動内容や方法について、学習者は概ね満足していたことがうかがえる。代表的な反応としては「プログラムは本当によかった（学習者a）」「満足です。もっと面白いことをできたし、時間はながすぎぐなかつたです。（学習者c）」「おもに学生たちによって進行されてきたので、少し大変だったが、いろいろな日本文化を体験できて楽しかった（学習者d）」「この授業を通じて茶道を始めて、いろいろな日本文化体験できてよかった（学習者f）」などの意見が得られた。しかし、学習暦の浅い学習者の1人からは「よかったですけど、何か負担がありました。（学習者b）」という回答があった。

「日本人と話すことができましたか」という質問に対しては、「少し話すことができた（学習者b）」「日本人と話をするとき、習った文法、単語を使ってよかったです（学習者f）」という回答や「話す機会はあまりなかった（学習者e）」「少しだけ文法使うことや話すことよりほかの活動が多いでしたと思います（学習者a）」など対照的な反応も見せている。さらに、「他に勉強したかったことはありましたか」という質問に対しては、「日本料理（学習者b、e、f）」「焼酎工場見学（学習者c）」「書道（学習者d）」「満足している（学習者a）」という回答を得た。

4-5-3. 学生が企画したことについて（学習者の回答）

「6/15～29の活動を学生が企画しましたが、どうでしたか」という質問に対しての回答は「これは名案だと思います（学習者c）」「直接電話かけてみたりいい経験になった（学習者d）」「先生とか日本人の友達ではなくて話す機会ができて良かった（学習者e）」など概ね好評だったが、日本語レベルが相対的にまだ未熟なAクラスの学習者は「いいきかいだとは思いますが、日本語もむずかしいですが、そのうえ企画までしましたから本当にふたんでした（学習者a）」という意見だった。

4-6. 全体の収穫と反省

第12期「教室外活動」では試みに授業前アンケートを行い、学習者に授業企画の一部を完全に任せてみた。このことを中心に全体から運営の収穫と反省点を述べたい。

第1に、授業前アンケート実施によって学習者のニーズをより深く知ることができた点良かった。このアンケートにより、学習者の興味に合った活動を多く取り入れることが

でき、学習者も最後まで飽きることなく積極的に授業に取り組んでくれた。

第2に、ニーズ分析は当然必要であるが、学習者の希望を優先しすぎて、本当に必要な活動を見落としてはいけないということが反省点であった。たとえば、「日本文化の体験をしたい」という表面的な学習者の希望を優先させて「文化体験」中心の活動をしたため、実際は学習者が日本人と話す機会を欲していたにもかかわらず、話す機会としては適切である日本人大学生とのディスカッションや小学校訪問などを企画に加えることができなかった。逆に、研究発表会、おしゃべりパーティーは授業前アンケートでは反対意見の多い活動であったが、必要性を考えた教師の判断で日程に加えた結果、「負担は大きかったが、やりがいがある活動だった」と学習者には好評だった。

第3に、学習者に企画を任せたことには学習者にとって時間的、経済的負担は大きかったものの、自主的な日本語学習、という観点においては非常に有意義であったと考える。問題は、教師の下準備には膨大なものがあるということである。見学候補地の検索、下調べ、見学先への事情説明、承諾の取り付け、日程の調整など、見学実現までの根回しには長時間にわたる配慮が必要とされた。さらに、学生の興味の変更などに伴って、教師の準備していた方向とは反対に企画が二転三転と変更されることも度々あり、たとえば「護国神社見学」「空手サークルとの交流」「中学校訪問」など交渉成立していた企画もキャンセルせざるを得ないこともあった。こうした舞台設定ののち、学習者が第1歩から日本語で見学先と交渉を始めていくという授業が実現した。学習者にとっても負担や労力は大きかったことは言うまでもない。日本語中級レベルのCクラスの学習者であっても、教師が電話帳やインターネットで工場などのリストを渡し、ようやく場所決定、交渉に至ったのだが、日本語にあまり慣れていないAクラスの学習者cにとって、生の日本人と個人的に交渉するのは段階的に難しく、不安を煽る部分もあったと思われる。

授業日程について、2コマ分の授業を行った翌週は休講にする予定であったが、最終的に休講は1回しか取ることができず、教師も学生も余裕がない日程であった。

5. まとめ

これまで、第12期研修コース「教室外活動」で実施してきた授業の運営内容と反省、またそれに対する学習者の反応について運営者の立場から記述してきた。第12期は試験的に授業前アンケートなどの予備調査を行い、学習者に企画を担当させることで主体的な学習者の活動を増やしてきたが、これは第12期の日本語レベルの学生に対しては有効であった。今期は受講者の半分を日本語中級レベルであるCクラス学習者が占めており、全体的に日本語学習能力や問題解決能力にすぐれた学習者が揃っていたため、教師も意識的、無意識的に高いハードルを要求した結果、なんとか形になったものである。したがって、今期のように、韓国出身の学習者が揃ってクラス全体がまとまった雰囲気であったことも含め、今後同じような形で教室外活動を運営する機会にはあまり恵まれない可能性が高いといえよう。学習者の負担だけでなく、教師の負担も大きすぎることから非効率的であることは

すでに述べたとおりである。

第13期以降の教室外活動をどのような形で運営していくことが望ましいのか、本授業の反省を踏まえて今後の課題としていきたいと考える。第12期に引き続き第13期も1コマに短縮されたままの授業が予定されていることから、より効率的に主体的な学習活動へ導きたいものである。

本授業では授業前アンケートにより、教師が学習者の意見を過度に重要視し、本来、学習者が必要とする学習部分までを見落としてしまったという反省を残した。今後は、学習者の主体性に全てを任せた学習活動と、ディスカッション、パーティーなど教師が提示した枠のなかで学習者の主体性に任せる学習活動との2種の学習活動を検討してシラバスを組み立てていくことが望ましいと考える。

注

- 1) 信州大学は工学部・教育学部が長野市、繊維学部が上田市、農学部が伊那市に散在する大学であり、研修コース在籍の学習者の中にも、将来、上記の学部へ行く学習者もいた。そのため、他学部への交通手段を調べることも、まだ日本に慣れない学習者にとって重要な意味を持った。
- 2) 矢沢直子先生。松本市城東在住。
- 3) 上原たけ乃先生。松本市和田在住。
- 4) NHK文化センターで毎週水曜午前10:00～12:00まで行われている着物講座で、上原たけ乃先生が講義されているものである。
- 5) 信州大学開学記念日のため。
- 6) Aクラスは別枠の「作文」授業で行った。
- 7) 松本市埋橋。
- 8) 松本市大手。
- 9) 宮坂信廣さん。
- 10) 土井田和広先生引率。「選択英語」専攻の中学2年生4名が同行した。
- 11) 以下、学習者の引用部については学習者がアンケートで記述回答した原文を記述している。
- 12) 学習者cは第11期から続けて研修コースを受講し、第11期「教室外活動」にも参加していた。第12期「教室外活動」を運営していくうえで、リピーターである学習者cのことも考慮に入れながら日程を組み立て、第11期で行った活動とはできるだけ違う活動を行うか、同じ活動を行う場合でもできるだけ新鮮に学習者cが学習できる環境を作るように努めた。

参考文献

青柳にし紀 2005

『「教室外活動」授業報告—信州大学留学生センター研修コース第8期において—』『信大日本語教育研究 第5号』信大日本語教育研究会

田中幸子・猪崎保子・工藤節子 1988 『コミュニケーション重視の学習活動1 プロジェクトワーク』

日本語教育学会コース・デザイン研究委員会 1991 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』

謝辞

本授業の運営にあたり、信州大学留学生センター佐藤友則教員をはじめ、留学生センター諸先生方に様々なご指摘、ご指導を賜りました。また、5月中旬よりボランティア補助として教室外活動のご指導に参加くださった狩戸真理子さんにもこの場をお借りして御礼申し上げます。

授業中、茶道・着付けの先生、石井味噌店、四柱神社、信州大学教育学部附属松本中学校の方々のご協力を得ました。また、都合上、授業企画をキャンセルせざるを得ず、ご迷惑をおかけした方々にはお詫び申し上げます。これらの方々のご協力がなければ本授業は成立しなかったと思います。厚く御礼申し上げます。多くのご相談にあずかっていただいた信州大学留学生課の方々にも感謝申し上げます。